サイチョンガにおける日本文化受容

―啓蒙思想と憂患意識―

エルドンバートル

はじめに

「ゆく河のながれはたえずして、しかも、との水にあらず。」（注①）この自然理法の如く、内蒙古の近代史も万物流転の運命を辿ってきたわけである。殊に、二十世紀初期は、蒙古民族の生存にかかわる極めて悲惨・暗黒な時期であり、その歴史的・社会的変動は著しい。一九一一年の中国の辛亥革命により、清朝が倒れ、中華民国が創立されて、外・内蒙古を含む全蒙古地域で民族権益・自由・独立のための革命運動が興った。その結果、外蒙古はロシアの援助など国際的外因もあって、一九二一年十一月十八日、中華民国からの独立を宣言して、哲布尊丹巴活仏を元首とする君主国を樹立し、一九二四年蒙古人民共和国に変容したのだが、内蒙古の独立運動は実現されず、中華民国の軍閥の支配に陥り、「内蒙古人は駐屯開墾、土地占領の災難に浴びられた」のである。（注②）その開墾の地積は、清朝末期の蒙古土地の開墾をはるかに超えることは、綏遠地区だけの状況を見ても分かる。

清朝末期から一九二八年まで、綏遠地区の開墾地積は十九万八千四百九十二頃（中国の地積の単位、一頃は百畝）である。その中、清朝末期は、七万九千五百六十頃、四十％を占め、一九一二年から一九一三年までは千二百三十四頃で、〇・六％を占めていたが、一九一四年から一九二八年までは、十一万八千九百三十二頃で、五十九％を占めるようになった。（注③）

一九二九年に入ると、中華民国の開墾・土地掠奪は残酷を極まり、その上、河北省、山東省、陝西省などの内地から大勢の漢人を入植させ、移民による民族同化政策を実施したのである。その結果、昔から蒙古人が遊牧していた多くの土地は、内蒙古に設置された民国の知県衛門の命令で移住民に与えられ、数多くの遊牧民はやむを得ず他郷を流離うようになり、「蒙古民の生計は剥奪され、蒙古人は苦しみの底に陥り、生存の術を無くした。」のである。（注④）

開墾・移民に従い、漢・蒙雑居の地域では、蒙古民族の伝統的生活様式・風俗習慣・言語文化の変容は著しい。これについて、『支那及び満蒙』の次の記述を見れば、その実態が窺われる。

蒙古人傳統のテントの家は支那風となり、傳統の牧畜は農耕と變化し（略）、これ等の地方は人口として支那人の數が多く、蒙古人は多人數の支那人村落のうちに僅少の人數で生活して居るから、常に支那人から壓迫を加へられ、馬鹿にされるやうになつたから小さくなつている。これが爲めいつも彼等は支那風をなし、支那語を話し、自分は蒙古人でありながら自ら僞つて支那人であると云つて居る者もある。（注⑤）

上記のような歴史的原因と、それに日本・ロシアの東部内蒙古をめぐる抗争など民族の興亡に関わる出来事が内蒙古人の民族滅亡の危機意識を引き起こし、生存のために立ち上がる抵抗運動を促した。一九二二年～一九二三年の、呼倫貝爾（ロシアと外蒙古に隣接する、内蒙古の東北地域）の郭道甫、福明太らの指導による全蒙古民族の人民政治を建設することを主張する独立運動、一九二九年一一月の、東部内蒙古哲里木盟ダルハン王の補佐官であったガダメリンの統率する蒙古民衆の武装蜂起、一九三〇～一九三一年の、西部内蒙古のオルドス地方における組合運動という民間の武装蜂起などが相次いで起こったのだが、結局、民国軍閥によって鎮圧された。だが、民族を救うとするその精神の続きとして展開されたのは一九三三年から一九四九年までの内蒙古自治運動である。徳王の指導下繰り広げられたこの運動は、蒙古近代史上、特に、後の内蒙古体制の形成及びその発展に極めて重要な影響を与えたと言える。この運動の切り離してはならない一環が文化教育の振興であり、この政策の一部をなすのが日本への留学派遣措置である。

一九三四年から敗戦の一九四五年まで、二百人の蒙古留学生（当時「満洲国」に属していた東部蒙古の留学生を除く）が日本へ派遣され、それぞれ教育・農業・牧畜・商業・医学・獣医・工業・土木などの学問を専攻し、内蒙古に戻ってから、内蒙古の文化・経済・政治など多くの分野に中核として貢献したのである。その中で、日本留学中、詩歌、日記体散文など多くの文学作品を書き、内蒙古現代民族文学の基礎を築き上げた人物はサイチョンガである。彼についての従来の研究は、敗戦後、つまり一九四五年十二月彼が蒙古人民共和国（今日の蒙古国）に留学して、マルクス・レーニン主義の思想を接受して創作された社会主義傾向の文学に集中している。彼の日本留学中の翻訳或いは生前発表されていない作品の収集といった研究も近年来なされているものの、日本留学中の彼の思想を具体的作品に即して、または当時の内蒙古独立・自治運動の歴史的・社会的環境において考察する研究は欠けている。もし彼の文学を当時の内蒙古の特殊な政治状況、蒙古人の蒙昧弱化などの実態と切り離して見れば整合性を持つその精神構造が支離滅裂になってしまう。というのは、彼は内蒙古自治政府の責務と期待を負う官費留学生として日本へ渡ったのであり、日本人の協力で創立された察哈爾蒙古青年学校時代から一九四五年マルクス・

レーニン主義の思想を受けるまでの間書かれた作品には世界の先進民族より文化的に立ち遅れている自民族の現状を改善し、外力に圧迫されている自民族を復興させるという精神が一貫しているからである。彼は、所謂純文学を目指した作家ではない、アナーキストでもない。

また、彼は日本留学中、「資本家階級の改良主義思想」を受け、「怠惰享楽」「無知蒙昧」は蒙古民族の堕落の原因であると見て、「文化を以て国を救う」などの「無意味なことを主張した」とする。これは「小資産家階級の知識人の幻夢と哀傷である」という従来の評価（注⑥）も階級理論的偏見である。確かに、彼は日本留学中に書いた『砂漠、我が故郷』（日記体散文）の中でラマ教に対する盲目的迷信、権威・圧迫などに盲従する当時の蒙古民衆の無知蒙昧的精神状態を痛感し、提示しているのだが、単なる「文化を以て国を救う」という主張は彼の作品のどこにも見られなく、無知蒙昧な民衆を啓蒙し、自民族を復興させようとする精神が作品全体に感受されるのである。

「啓蒙とは、人間が自己の未成年状態を脱却することである」「未成年とは、他者の指導がなければ、自己の悟性を使用し得ない状態である」「ところでかかる啓蒙を成就するに必要なものは全く自由にほかならない。」とカントは言っている（注⑦）ように、一民族にとって見ても同じことが言える。自由・独立の精神が欠けている民族は、他者の権力意志に左右されやすい。特に危急存亡の時代にあっては自由と独立の問題は、一個人のことに関わるだけではなく、民族の問題でもある。その民族が恥辱、圧制を受けた時は、一人残らず一致団結して、民族の尊厳を守り抜くことにこそ一民族の自由・独立はあるのである。

この小論では、上述の問題意識を以て、サイチョンガの『家庭興隆之書』、『心の伴侶』、『砂漠、我が故郷』などの著作をめぐって、その日本留学中の啓蒙思想と憂患意識の実態を探ってみたい。

一、歴史的背景

サイチョンガが日本へ渡る一九三七年は、内蒙古自治運動の歴史において極めて重要な時期であり、運動方針の転換期でもある。一九三三年の春、徳王の率いる蒙古自治運動が始まり、一九三四年一月創立されたこの運動の初めての組織的運営機構である蒙古地方自治政務委員会は民国の干渉・陰謀で一九三六年一月解体され、一九三六年五月蒙古軍政府、一九三七年十月蒙古聯盟自治政府が成立されたのである。この頃から徳王は、「蒙古が衰弱している原因は、教育の時代遅れであり、蒙古を振興させるためにはまず教育から着手しなければならない。」（注⑧）と主張し、これが、民族の素質を高め、民族文化を保全して自民族を救おうとする上層階級の人士・知識人たちの広範な支持を得て、自治運動は一層進められたのである。蒙古軍政府が成立された後まもなく初等教育、中等教育、高等教育など三段階の学制が制定され、西部内蒙古の各盟・旗・県・市に多くの学校が創られ、蒙

古振興の一環として大勢の官費留学生が日本へ派遣されるようになった。

もちろん、内蒙古の教育史上、日本への留学派遣は西部内蒙古で始まったのではない。既に、東部内蒙古喀喇沁の王様であった貢桑諾爾布（一八七二～一九三一）によって、一九〇三年建学された毓正女子学堂に教師を務めていた河原操子が一九〇六年日本へ帰る際、金淑貞、何慧珍、于保貞ら成績が優秀な三人の女子を連れて、東京実践女学校に留学させたことに始まっている。東部内蒙古では、一九三四年十二月、関東軍参謀部の「臨時蒙古人指導方針」により、蒙政部が開設され、各地から優秀な学生を選び、日本へ留学させるようになったのである。その「臨時蒙古人指導方針」の中に「教育を普及して、特に指導地位にある人々に必要な教育を与え、その素質を高めるために必要な教育施設を設けるべし。」と（注⑨）強調している。

上述の、日本軍部の対蒙古教育方針、または当時「満洲国」に属していた東部内蒙古の日本への留学生派遣などの情勢が徳王政府の教育・留学生策略の施行に絶好の機会を与えたに違いない。一九三六年十月、蒙古軍政府教育署は日本善隣協会の協力で第一期官費留学生として十人をそれぞれ慶応大学医学部、盛岡高等農林学校農学部、東洋大学教育部、東京高等師範学校、善隣高商特設予科、陸軍師範学校などに送った。そのうち、東洋大学に送られたのがサイチョンガである。

彼は、地元の小学校を卒業してから一九三六年、察哈爾蒙古青年学校に入ったのである。そこで日本語などの科目を修学していた彼は、優等生として選ばれ、日本へ渡り、善隣協会において一年間日本語をマスターして、翌年に東洋大学教育部に進学したのである。在学中、近代日本文学に接触し、北原白秋、武者小路実篤など日本の作家たちの著書、または日本語を通してロシアのプーシキン、トルストイ、ドイツのハイネ、イギリスのバイロン、アメリカのホイットマンなどヨーロッパの小説家・詩人たちの作品を数多く耽読し、その文学の道程を歩み始めたのである。

政治・経済・思想・科学・芸術の各方面において、西欧文化を摂取・移入して、文学も、伝統的な精神風土の上で、西洋の近代思潮を取り入れ、急速に近代化されていく日本の実相をその目で見、耳で聞いて体験したことが彼の精神構造の形成に大きな役割を果たしたわけである。

二、憂患意識と民族復興

一九四一年、サイチョンガはその処女詩集『心の伴侶』を世に出した。この詩集は、「自然の公園・文化の都—日本」、「宿望の泉」、「砂丘の霧」、「成吉思汗の血を引く蒙古激情」、「雑歌」など五部の詩歌から構成され、第一部の詩歌には、日本の自然風景を賛美し、その文化・科学の進歩を羨望する心情が歌われ、第二部の詩歌には、前途に

光明を見出そうとする願望、自由への憧憬、弱小の蒙古のために勇み立とうとする蒙古青年たちへの呼びかけなどの情緒が優美な詩行の中に織り込まれている。第三部の詩歌には、故郷への思いが歌われ、第四部の「成吉思汗の血を引く蒙古激情」という表題の詩歌には、成吉思汗の勇武の精神を以て民族を復興させようとする意志が歌われている。第五部には、「籬下の若草」「憤激」「花姫」などの詩が収められている。

古今に例の無し
我が先祖の精神
心もとに光れり
成吉思汗の子孫たちよ
今し勇み起とう
兄弟のように親しむ
アジアの種族
正義を以て振起すべし
成吉思汗の子孫たちよ
今し勇み起とう
（後略）

これは、「成吉思汗の血を引く蒙古激情」と題する第四部に収められた「成吉思汗の子孫たち」という詩の冒頭の部分である。初出が不明だが、彼が日本留学中の一九三七年から一九四一年の間に書かれたことは確かである。既述の民国の軍閥に蹂躙される内蒙古の歴史的背景、蒙古民衆の災難に浴びる暮らしなどに照りあわせてこの詩を読めば、今すぐ勇み上がって闘わなければその民族は滅びてしまうだろうという憂患意識と民族を復興させるという切望が感受されるだろう。一見したところ、平凡の呼びかけの詩のように見られるのだが、細心に玩味して見れば、かつて世界を征服した先祖の成吉思汗時代を顧みて、世に落魄れている今日の運命を悟らなければならないという重みが連想の空間に隠されているように考えられる。

防いでくれよ、光の窓
寒気を以てわが身を襲う夕暮れの風を
吹雪のように胸をむなしく吐く冷たい息を
蒙霧を以てわが魂を乱す夜の闇を
防いでくれ、光の窓よ

流してくれよ、わが家へ
憂鬱な心を明かす曙を
偉大なるわが宿願を灯してくれる輝く太陽の光を
知恵の啓蒙を覚めしてくれる新鮮な空気を

流してくれ、わが家へ・・・光の窓よ（後略、「光の窓」より）

『心の伴侶』の「宿望の泉」と題する第二部に収められたこの詩も当時の内蒙古の社会・政治的実情を後景として書かれた作品であり、暗黒と光明、憂鬱と曙、蒙霧と啓蒙の対比によって民国軍閥の暗夜の如く支配・圧迫から解放され、太陽の光のような自由への祈願が暗示的に表現されている。

一言すれば、危急存亡のせとぎわに瀕している自民族への憂患意識とその民族を復興させるため蒙古の若者たちが一致団結して勇み起とうとする心の叫びが『心の伴侶』詩集の主調音になっている。また、詩集の冒頭に「自然の公園・文化の都―日本」と題する詩歌を前景として置き、内蒙古に関する詩歌を後景にする構成自体が当時の蒙古読者に、自然公園の如く繁栄・自由の美しい日本に鑑みて、自分たちが置かれている移民・開墾、政治的・経済的圧迫の酷くなっていく社会環境を顧みてもらう狙いを物語っているように考えられる。

サイチョンガが日本留学中書いたもう一部の作品は、彼が夏休みで帰郷する際の見聞を日記体で綴った散文集『砂漠、我が故郷』である。その序文には、「聖なる成吉思汗歴の七三五年、日本国の東京市にて」と書いてあるのだが、何月なのかが不明である。七三五年というのは西暦の一九四〇年であり、一九四一年、蒙彊徳王府印刷所から出版されている。この散文集には主に当時の蒙古社会の実態、貧困災難に苦しむ蒙古民族の暮らしを写実的に描き、上層官吏の卑怯蒙昧を批判している。または、ラマ教の名義を借りて民衆を騙す僧侶たちの罪悪な行為を暴き、それを盲信する民衆の無知蒙昧な性向を痛感して、阿片に蝕まれ、飲酒に耽溺して心身的に衰弱していく蒙古人の状況にも蒙古民族の惰弱の原因を認めている。そして、所々に日本の主な都市の繁栄事情を紹介し、日本のような世界先進国の文明に立ち遅れている自民族を啓蒙して振興させる祈願を表現している。

上述のラマ教のことは、清朝時代に始まった、仏教を利用して蒙古を支配するとした清朝の政策に関わる問題である。これに関して、『実録中国踏査記・上海東亜同文書院大旅行記録』には、次のように記してある。

清朝国を立つるや武威を似て之を屈すべからず長城も居庸の堅関の彼等の一撃に対しては殆ど何等の用を為さざるを悟り陰険にして巧妙なる政策を取れり、即ちモンゴルのラマ教を篤く信ずるを利し鋭意奨励し一面に於いては彼等が関心を得ると同時に他面に於いては彼等をして過去及未来の問題にならしめ似て現在の栄華功名を思うの暇なからしめ同時に、其平和神秘なる教義により彼等の剽悍殺伐を好む性を和らげ一挙両得の功を収めんとせり。（注⑩）

蒙古民族のもともとの宗教はシャマニズムであった。つまり、蒼天を信仰していた。元朝時代フビライ汗は漢民族の儒教・道教の影響を防ぐため、または、それぞれの宗教・文化を持つ多くの部族を一教のもとで統治するため、仏教をチベット経由で蒙古国教にしたわけである。当時、仏教は蒙古支配階級の間では影響力があったが、多数の遊牧民たちは依然として固有のシャマニズムを信仰していて、元朝の滅亡にしたがって、仏教の影響も姿を消してきたのである。（注⑪）だが、長い歴史的騒乱を経て、蒙古が清朝の支配に入るようになると、清朝は喇嘛教を以て蒙古人の勇猛な性質を抑える政策を取り、その勢力は内・外蒙古に盛んになったのである。

話は『砂漠、我が故郷』に戻る。形式の面から見れば、この散文集は七月一一日から九月二日までの五十三章段からなり、章ごとの結尾或いは中間に短長異なる詩歌を詠んでいる。この書き方は、武者小路実篤の『自己を生かす為に』（新潮社、一九一九年）に収録された日記体散文に啓発された発想であるかも知れないという風に内田孝は推測している。（注⑫）確かに、サイチョンガは、武者小路実篤の『自己を生かす為に』に収められた「自分はもう」という作品を蒙古語に翻訳して、一九四二年六月『新モンゴル』雑誌に発表しているのだが、東洋大学在学中日本の文学作品を数多く読んでいた彼は、歌物語の『伊勢物語』、『土佐日記』などの日記文学を知っていたはずであり、清朝時代の蒙古の著名な作家である尹湛納希の『青史演義』（長編歴史小説）などの章回小説（章ごとの後に詩を付ける）を読んでいたので、どちらの影響も考えられる。

では、この散文集の日本に関わる記述から引用して、彼の日本に対する内面世界の一隅を覗いてみる。

人間の最終の目的は先祖から子孫に受け継がれる自民族のために命を捨てて力を尽くすことにある・・・などの歌唱や話し、戦場に赴く勇士たちと祖国に残るその家族の人々のこのような、祖国と自民族を命を以て守り抜くとする誓いを耳にする度に、わが蒙古を愛する心が火のように燃え上がる。既述の様子を見ても日本が世界の強国の名誉を勝ち取った原因をすぐさま分かるだろう。確かに、一国或いは一民族の興亡はその民衆の、自民族を愛する心の強弱に関わる。（略「七月十一日の日記」より）

これは、帰郷の際、東京駅で戦場に赴く兵士たちが見送られる場面を目の前にして綴った作者の激動する心の声である。ここには、一般に言う侵略戦争に従事する日本軍人への嫌悪の気持ちは見られなく、むしろ自国のために、自民族のために戦うとする兵士たちの精神が共感されているように感受される。当時の内蒙古の自治運動の状況から考えてみれば、蒙古民族の一員としての彼の心情は理解されるだろう。

六〇、七〇年前ころから朝鮮のこの地域が乱伐で裸の山に変わっていたそうである。後に日本が朝鮮を統治してから、この地域の気候、地形、土質などについて細かく検査・研究を行い、それに適う各種の樹木を植え、人間の知恵、優れた腕前、強い体力を以て造林事業に励ましたお蔭で、今日のような緑したたる木々に囲まれたすばらしい自然景観が創られ、地元の人々に多大な利益をもたらしたのである。（中略）嗚呼、わが砂漠の故郷の仲間たちよ、先祖の時代から暮らしてきた富饒な故郷を裸にして食いつぶすしか知らず、懸命にして豊潤富麗な環境にすることを思案しないで怠けているのは先祖から授けた賜を無駄にしてしまうことではないか。（中略）こんな状態で蒙昧に麻痺していれば、どうやって生きられるのか。（略、「七月十三日の日記」より）

先祖の時代から遊牧して暮らしてきた蒙古草原が既述の開墾・移民定住などによって砂漠化されている内蒙古の様子を後景に置く、隠し縫いのようなこの書き方には、他人の顔を見て動くのではなく、自分から勇み起ち、置かれている苦境を改善しなければならないという批判意識が働いているのである。この日記体の散文集を綴る時、作者には、近代日本、文明の日本、強国の日本が後景として意識され、広い連想の空間を創りだしている。そこに当時の彼の精神構造の有様を感受することができるように考えられる。

三、啓蒙思想と科学

一九四一年、サイチョンガは東洋大学を卒業して帰郷し、一九四二から一九四五年の春まで、蘇尼特右旗女子家政実験学校で教鞭を取った。

徳王の故郷で創立されたこの女子学校は、西部内蒙古の教育史上初めての蒙古族の女子校であり、当時の蒙古族の女性たちが新文化・近代的知識に接触する模範校であった。主な習得科目は、蒙古文、数学、歴史、地理、時事、図画、音楽、家政、衛生、裁縫、乳製品・牧畜業関係の加工作業、野菜栽培などの近代的実用技術であり、「女子は一家の主婦であり、現実に切り離すことのできない牧畜生活に適応するため、女子学校は純蒙古式をその教育基本方針とするべし」（注⑬）という徳王の主張に従い、知識と実践を結びづけ、純蒙古語で講義していた。徳王は、この学校を基盤として、蒙古自治政府が支配する地域で女子教育を普及させる計画を思案していただろう。一九四二年になると興蒙女子学校が創られ、二年間に渡り、以上の二校で本旗の学齢女子はほとんど募集され、四一年から四七年まで合計三百名の女子が教育を受けている。

この二校の建学がきっかけとなって西部内蒙古全般に女子の入学率が増え、女子学校が多く創られるようになった。例えば、一九四〇年の末まで一人の女性も学校教育を受けていなかった錫林郭勒盟では、

一九四二年の末まで三十八校の小学校に四百三十四名の女子が勉強するようになり、一九四三年四月まで、錫林郭勒盟・烏藍察布盟では興蒙女子家政実験学校が二十六校創られているのである。（注⑭）

では、話はサイチョンガに戻る。彼は、蘇尼特右旗女子家政実験学校に来てから、明治維新など世界文明史、蒙古語、蒙古歌謡、自然学、衛生などの科目を担当して教えるほか、自分が書いた『家庭興隆之書』も教科書として教えていた。この著書は、蒙古族の女性向けの、科学を以て人々を啓蒙しようとする狙いが込められた実用的・家政学的書物である。一九四二年五月に書き終えて、同年十月、蒙彊徳王府印刷所にて出版されている。甲乙丙という三章から構成され、「良き家庭にする為の提案」と題する甲の章では、人間と家庭、国家と家庭、家庭と女性、復興する蒙古の家庭と女性の有機的関係を具体的例を挙げて説明し、「家庭は国家と民族の興隆の源である」とその序文に書いているように、蒙古民族を復興させる偉業における家庭の果たす大いなる役割を述べている。乙の章では、家庭を興隆させ、良き家庭にする為には、計画を練り、勤勉に働くことの重要性を強調している。または、家庭における衛生を重視して、それを居住の衛生、家具の衛生、衣服の衛生、飲食の衛生など各面から論じ、それらが蒙古人の健康、寿命に及ぼす働きを科学的に解釈している。そして、家庭の礼儀・家庭教育が人間形成に及ぼす大きな影響を述べ、伝統文化を守って、親に孝行を尽くすべきであると主張している。

伝統文化を守ることについて、作中には次のように書いている。

> 生活習慣、暮らしの有様は、世界文明の進歩に従って改善されるものだが、（略）新しい時代の若者たちに願うことは、伝統文化を捨てるのではなく、それを基盤にして外来の流行の思潮に歩調を合わせるべきである。（後略）

これは、明治維新における西洋文化の摂取を連想させる考え方であるのだが、今日の国際化情勢の中で、自民族の固有の文化をどう守るべきかという問題にもかかわることである。

丙の章では、科学的生き方で家庭を興隆させることは、蒙古民族の暮らしをより豊かで幸せにする歩むべき道であり、蒙古を繁栄させるためには、飲食、居住などの各面で先進国の科学的やり方を学ぶべきであるという作者の祈願が述べられている。

上述の内容を持つ『家庭興隆の書』を教科書として教え、「国家と民族の興隆の源である」（序文）家庭の担い手としての女性たちに近代科学の知識を普及させようとしたサイチョンガの活動は、蒙彊徳王府の教育方針に従うことでもあり、世界文明に取り残され、「貧困・病気・無知」がその衰弱の「三大病根」（注⑮）であった当時の内蒙古民衆の知性の開化に一定の役割を果たしたに違いない。因みに言えば、サイチョンガは日本に留学していた時から、近代科学技術に関す

る文章を蒙古語に翻訳し、雑誌に出していた。内田孝の統計によれば、『青旗』の第九号～第二十五号に、『子供に聞かせる発明発見の話』（原田三夫著）など合計二十一篇の翻訳作品が発表されているそうである。（注⑯）

「外国の優れた文化を移入して自分のものにし、自分たちの智慧、腕前、体力を頼りにして、輝かしい新しい文化を創ることは我々の将来の偉業である。」と彼は一九四三年頃書いた『我が蒙古強盛の歌』（文明評論風のエッセイ集）に収録された「文明開化と生計」という文章の中で主張しているように、既に日本留学時代から、科学文化によって民衆を啓蒙し、民族復興の事業を進めることが構想されていたように考えられる。その意識の後景に日本の明治維新の構図があったはずである。

おわりに

世の中、「万物流転」という思想があるのだが、変わるのは物事に対する人間の認識であって、物事の本質は変わりはしない。認識も立場によって変わり、感情に左右されやすいらしい。サイチョンガに対する私の認識もそうである。

私がサイチョンガの文学に接触したのは、高校時代テキストに載っていた彼の「歓喜の歌」（一九五九）などを読んだ時である。それらの作品はほとんどが社会主義への讃美歌、或いは社会主義国家に生きる遊牧民たちの幸せな暮らしへの讃えであった。「讃美」という心情は、当時の私にとって好ましくないものであった。というのは、人間形成の初段階である幼少年期を「文化大革命」という動乱の時代に悲しく送った私の精神世界は陰鬱な情緒に覆われていたからである。そうした感情のせいであったのだろうか、それから、彼の作品を読まなくなった。

近年、世界情勢が流動しつつあり、文化共生共存の理念が唱えられ、日中文化交流が盛んになるにしたがって、サイチョンガの日本留学時代における文学・翻訳・社会活動などの研究も進められ、彼の全集も出版されている。この動きが原因となったかは感知しないのであるが、とにかく、サイチョンガの文学の実態は何なのかという思いに誘われ、彼の全集を読んでみたところ、彼の文学は蒙古人民共和国にてマルク・スレーニン主義の教育を受けた一九四五年を境に転向したように考えられる。つまり、敗戦前は民族主義的文学であったのだが、敗戦後社会主義的プロレタリア文学に変容したわけである。

蒙古国の著名な作家であるバ・バストは、サイチョンガについてその回想文の中で「外国に留学して世界文学に出会った」「その祖国は自由・幸せというものがなかった時代であった故に、詩行の後にその思想を隠していた。とにかくその『心の伴侶』の詩歌は彼の詩歌の頂点と見るのが理に当たる。」と高く評価している。（注⑰）

ここに言う外国とは日本のことで、確かにサイチョンガの日本留学

中書上げた詩集『心の伴侶』の作品は芸術性が高く、象徴、暗示の手法をうまく操り、一人知識人の憂鬱、憂患などの情緒がその詩行に織り込まれている。だが、それらの情緒は単なる個人のものではなく、故郷の内蒙古に苦しめられる自民族という存在と結びつく情緒であったのである。

彼の日本留学時期における文学を、「日本侵略者の奴隷化教育の影響を受け、作者の経歴及び世界観の限界により、日本の侵略に抵抗せず、逆に資本主義国家である日本の文明を羨んで讃えるところが多い。」という批評（注⑱）があるのだが、これは歴史の実相に真正面から向き合わない、時局むけの政治的観念論である。日本留学時代におけるサイチョンガの文学を論じる時、内蒙古自治運動という特殊な歴史環境の真実を前提に、彼を取り巻く社会の様態を考察し、具体的作品に即して解釈を行うべきである。史的事実を歪曲し、具体的な作品の意味合いから逸脱した外部理論や政治的観念の枠に押し入れて文学を解釈するならその実態がどうしても見えてこないわけである。

既述のように、サイチョンガは当時の蒙古軍政府或いは徳王の期待を担い、官費留学生として日本へ派遣されたのである。このような背景を持つ一人の知識人が自民族のために創作し、時代遅れの蒙古から世界先進国の日本に渡り、そこの文明に驚き、羨んで讃えることは当たり前のことで、その主体意志は本人の自由である。

周知のように、日本留学時代におけるサイチョンガの文学は、近代日本文学及び日本を通して接触した世界文学、そして当時の内蒙古の歴史的・社会的実状にそって成長したものであり、その主調音は、民族の存亡に関わる憂患・復興意識、啓蒙思想である。

文学者としてのサイチョンガは、内蒙古現代文学史の上で看過できない存在であり、内蒙古現代文学の基盤を築き上げた先駆者の一人である。

注

注① 鴨長明『方丈記』、岩波書店、一九二八年

注② 注⑧ジャクチト・スチン『私の知るところの徳王と当時の内モンゴル』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九九三年

注③ 蒙古族簡史編著組『蒙古族簡史』、内蒙古人民出版社、一九八五年

注④ 白楊策・彭武麟編集『中国近代民族関係史』、中央民族大学出版社、一九九九年

注⑤ 佐藤義亮編輯『支那及満蒙』、新潮社、一九三二年

注⑥ 斉木道吉、簗一孺、趙永銑ら編集『蒙古族文学簡史』、内蒙古人民出版社、一九八一年

注⑦ カント『啓蒙とは何か』、篠田英雄訳、岩波書店、一九五〇年

注⑨ 島田俊彦・稲葉正夫編集『日中戦争』現代史資料8参照、美鈴書房、一九六五年

注⑩ 滬友会編集『実録中国踏査記・上海東亜同文書院大旅行記録』、新人物往来社、一九九一年

注⑪ チ・ダライ『蒙古史』参照、内蒙古人民出版社、二〇一〇年

注⑫ 注⑯内田孝「サイチョンガにおける一九四五年以前の翻訳活動」、

内蒙古大学紀要、二〇一七年五月号

注⑬　内蒙古教育志編集委員会『内蒙古教育史志資料』参照、内蒙古大学出版社、一九九五年

注⑭　福島義澄編『蒙彊年鑑』、蒙彊新聞社刊行、一九四四年

注⑮　郭道普「蒙古問題講演録」、中国人民政治協商会内蒙古自治区委員会文化歴史資料研究委員会編集『内蒙古文化歴史資料』第三十一輯所収、内蒙古人民出版社、一九八四年

注⑰　道・策徳布（蒙古国）、格日勒𦈡布編集『納・賽音朝克図拾遺詩』内蒙古人民出版社、一九九九年

注⑱　色・桑布、呼群編集『賽春阿』、内蒙古人民出版社、一九八七年

付記　サイチョンガの作品の引用については内蒙古人民出版社『サイチョンガ』（一九八七年五月）に拠り、筆者が日本語に訳した。

キーワード：日本、サイチョンガ、憂患意識、民族復興、啓蒙思想